

2021 EAJRS in Saint Petersburg
第31回日本資料専門家欧州協会年次大会
日本資料における実質性・仮想性
2021年9月15日(オンライン報告)

在外日本関係史料の調査と 研究資源化について

保谷 徹 Toru HOYA
(東京大学史料編纂所)



東京大学史料編纂所

はじめに

○東京大学史料編纂所は、国内・海外に所在する前近代の日本史史料を調査・収集し、日本史の基幹史料集（『大日本史料』など1200冊以上）の編纂を続けています。

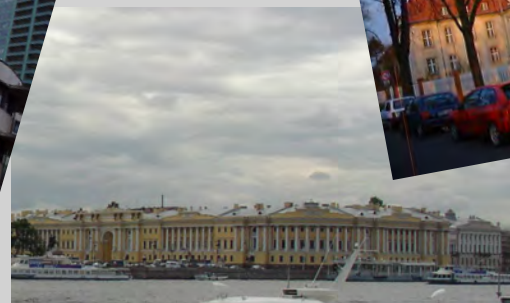
○本報告では、海外に所在する日本関係史料の調査・研究プロジェクトの経過と到達点についてご報告し、あわせてこの20年ほど取り組んできたロシアにおける共同研究の成果をご紹介します。



1 在外日本関係史料の研究資源化

1) 在外日本関係史料とは何か

○海外に所在する日本関係史料には、①外国の政府・機関・個人のもとで作成・蓄積された日本に関する史料とともに、②日本国内で作成され、その後海外へ持ち出された史料を含みます。



1 在外日本関係史料の研究資源化

2) 調査・研究の経過 〈海外調査の端緒〉

○1888年、帝大の歴史学教師リースは「蘭国海牙（ハーグ）府の記録局に、日本歴史に関する数多の貴重なる文書あり」とする意見書を大学に提出しました。



ドイツ人歴史学教師
Ludwig RIESS (1861～1928)



帝大総長渡辺洪基



外務大臣大隈重信

渡辺総長は、大隈外相にオランダでの日本関係史料の写本入手を依頼します。

1 在外日本関係史料の研究資源化

2) 調査・研究の経過 〈海外調査の端緒〉

○リースの意見書は、帝大に移管された史料編纂所の前身機関の事業に役立てようと述べていました。

はじめて海外のオランダでの史料調査（史料の謄写）が実施されました。平戸・長崎のオランダ商館に関する史料群が対象でした。



1889～1892年に作成した写本史料（1614～1639年分）唯一現存するもの

1 在外日本関係史料の研究資源化

2) 調査・研究の経過 〈海外調査の端緒〉



その後、リースに学んだ
村上直次郎（1868～1966）
によるヨーロッパ調査も行
われました。



村上が収集した史料に基づく、1582年天正遣欧使節関係史料
を収めた『大日本史料』（東京大学史料編纂所、1959年）

1 在外日本関係史料の研究資源化

2) 調査・研究の経過 〈UAIプロジェクトの開始〉

○1922年、第1次大戦後に設立された国際学士院連合（UAI）の事業として、日本学士院による未刊行在外日本関係史料の調査事業の開始が承認されます。



UAI総会に参加した三上参次
(1865～1939)
現在の史料編纂所長にあたる



*Union Académique Internationale
Palais des Académiesのうち
Bruxelles*

1 在外日本関係史料の研究資源化

2) 調査・研究の経過 〈UAIプロジェクトの開始〉



○在外日本関係史料調査事業は、第2次世界大戦によって中断しましたが、戦後の1954年、東京大学史料編纂所へ正式に委嘱され、再開されました。



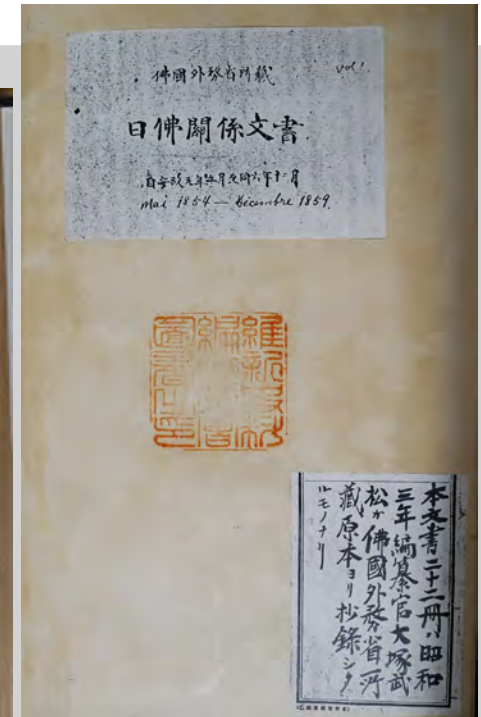
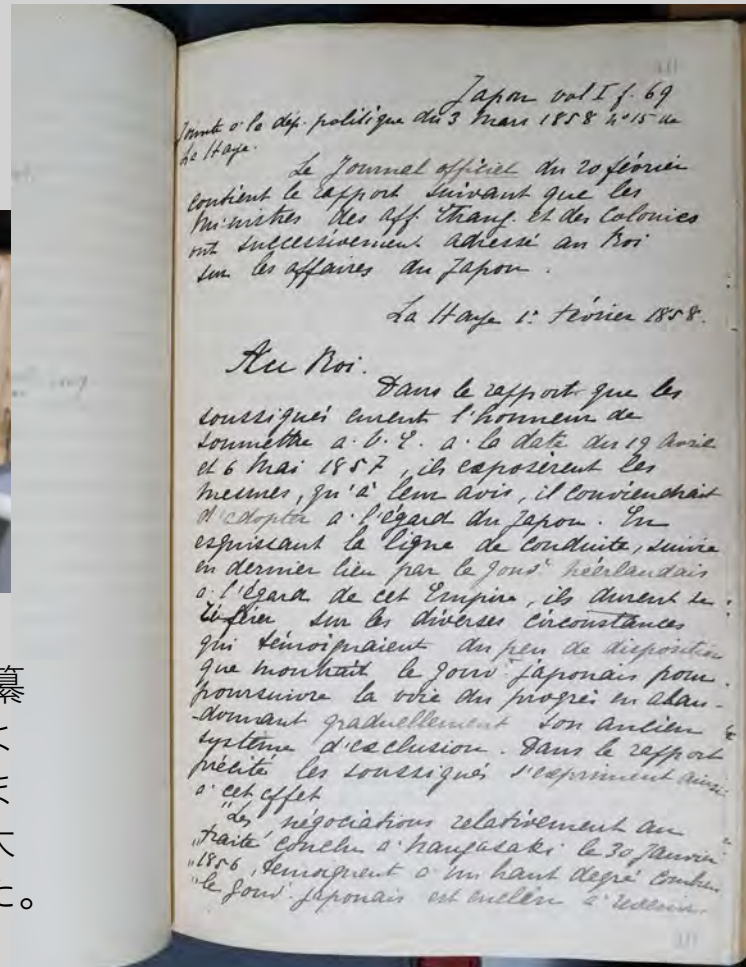
日本学士院 山田三良院長



東京大学 矢内原忠雄総長

1 在外日本関係史料の研究資源化

2) 調査・研究の経過 〈維新史料編纂会の海外調査〉



○1928年、文部省維新史料編纂会事務局の大塚武松編纂官による英仏の史料調査が実施されました。この機関は戦後、東京大学史料編纂所に合併されました。

大塚武松が
謄写で収集した
仏国外務省文書

1 在外日本関係史料の研究資源化

2) 調査・研究の経過 〈東京大学史料編纂所の海外調査〉

○東京大学史料編纂所による戦後の調査は、16世紀から19世紀後半までの在外史料（欧米史料中心）を主にマイクロフィルムで収集しました。

対象は、イエズス会などキリシタン関係の史料群、英蘭の東インド会社史料群、さらに19世紀後半の欧米各国における外務省史料、海軍省史料、植民省史料など

日本関係を含むファイルをマイクロフィルムで収集、約2800リール150万コマ。



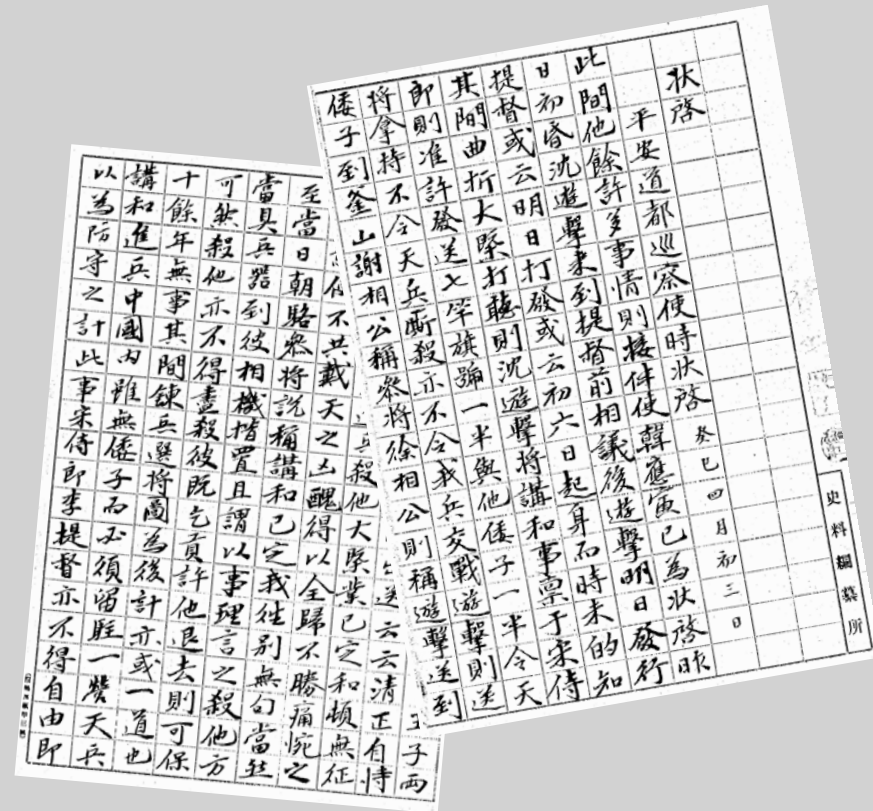
マイクロフィルムによる史料収集／海外史料室での目録15冊の出版

1 在外日本関係史料の研究資源化

2) 調査・研究の経過 〈東京大学史料編纂所の海外調査〉

○一方、(古代からの) 中国・朝鮮における日本関係史料は、正史・実録、地方志、個人文集などの漢籍を中心に調査・収集を行ってきました。

戦前期も何回か長期調査が試みられ、漢籍の日本記事を謄写してきましたが、戦後は中断され、いわゆる歴史档案の調査なども難しい状況でした。



日本関係朝鮮史料 (謄写本)

1 在外日本関係史料の研究資源化

2) 調査・研究の経過 〈東京大学史料編纂所の海外調査〉

○1999年、報告者が責任者となり、ロシアを含む東アジア諸国に所在する日本関係史料を調査するワーキンググループ（東アジア史料WG）を立ち上げて、ロシア、中国、韓国など東アジア地域での史料調査を再開しました。



ロシア国立歴史文書館



ロシア国立海軍文書館



1 在外日本関係史料の研究資源化

2) 調査・研究の経過 〈東京大学史料編纂所の海外調査〉

○ロシアの旧都サンクトペテルブルクでは、これまで計4冊の史料解説目録を刊行し、関係史料をデジタル画像で収集してきました。

日本学士院の支援も得て、この間、のべ20回の国際研究集会を東京で開催しました。



ロシア国立歴史文書館所蔵史料の
解説目録 (2010・2020)

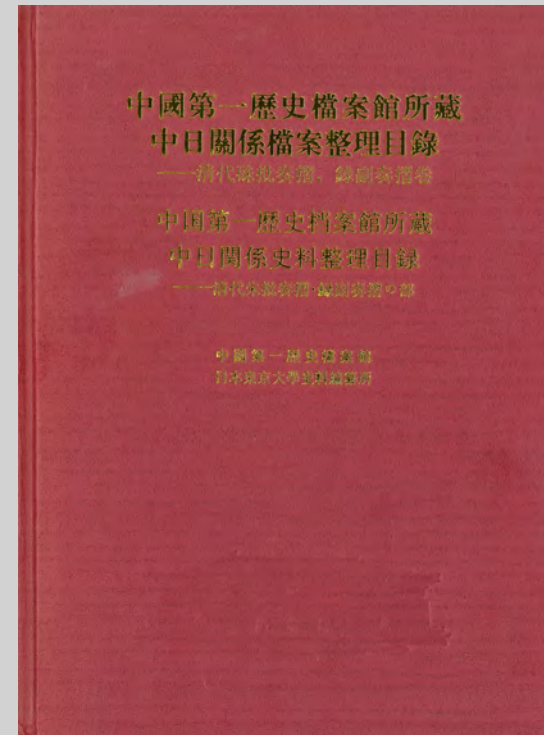
ロシア国立海軍文書館所蔵史料の
解説目録 (2011・2017)

1 在外日本関係史料の研究資源化

2) 調査・研究の経過 〈東京大学史料編纂所の海外調査〉



○中国では、中国第一歴史檔案館の協力を得て、清代朱批奏摺・録副奏摺について『中日関係檔案整理目録』（2010年）を刊行し、約3000点の皇帝檔案をデジタル画像で収集しました。



中国ではその後、中国国家博物館との倭寇図像に関する共同研究にも発展しています。

1 在外日本関係史料の研究資源化

3) 研究資源化の到達点と意義 〈デジタルアーカイブの構築〉

○2010年代半ば、東京大学史料編纂所では、これまでのフィルムカメラによる史料収集からデジタルカメラによる史料収集へ機材・体系を切り替え、マイクロフィルムで収集した史料画像のデジタルアーカイブ化を進めました。

○在外日本関係史料の調査事業も、アナログからデジタルへ切り替えることになります。

○ウェブ公開と閲覧室公開を合わせると、現在では史料画像データ2000万コマを超える巨大なデジタルアーカイブが構築されています。



1 在外日本関係史料の研究資源化

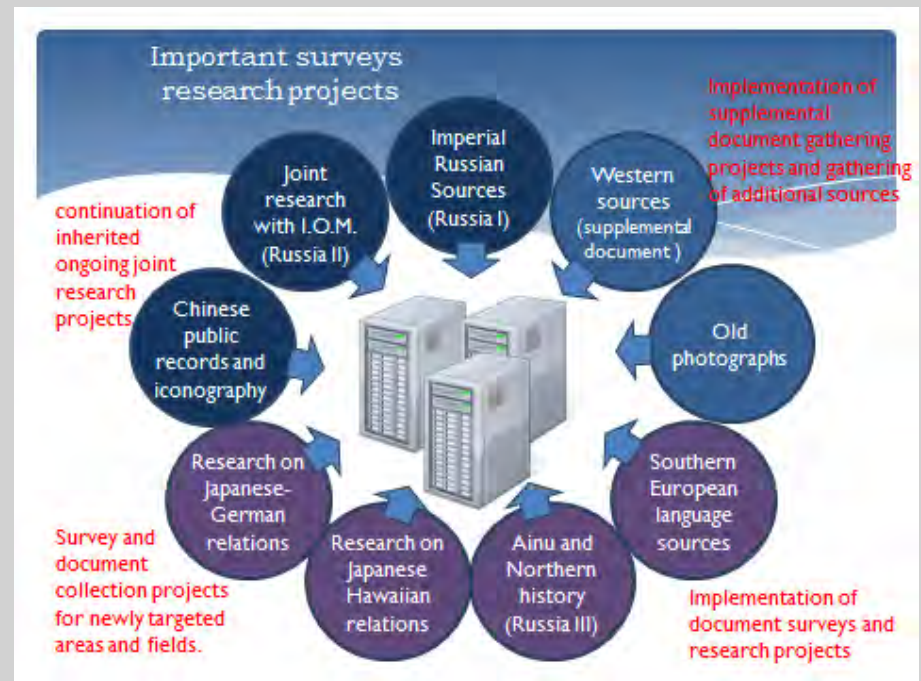
3) 研究資源化の到達点と意義 〈デジタルアーカイブの構築〉

○2014～18年度、在外日本関係史料のデジタルアーカイブ化プロジェクトに集中的に取り組みました。

海外での補充調査や海外機関との共同研究を進めるとともに、マイクロフィルムからスキャンした史料画像に目録情報を付与し、データベース化して検索・閲覧可能にするためのデジタルアーカイブを構築しました。

科学研究費補助金基盤研究S「マルチアーカイブアル的手法による在外日本関係史料の調査と研究資源化の研究」（研究代表者：保谷、2014-2018、1.58億）

"Researching the collection and utilization of overseas Japan-related sources through multi-archival methods".



1 在外日本関係史料の研究資源化

3) 研究資源化の到達点と意義 〈デジタルアーカイブの構築〉



○プロジェクトに参加したチームでは、この間、ドイツやハワイ王国の史料群、ポルトガルのモンスーン文書など、多くのまとまった史料群をデジタルで収集しています。

○在外日本関係史料のデジタルアーカイブは、世界21か国70機関から約220万コマに及び（PJで収集した編纂史料集を含めると242万コマ）、史料編纂所の閲覧室端末で閲覧利用できます。

1 在外日本関係史料の研究資源化

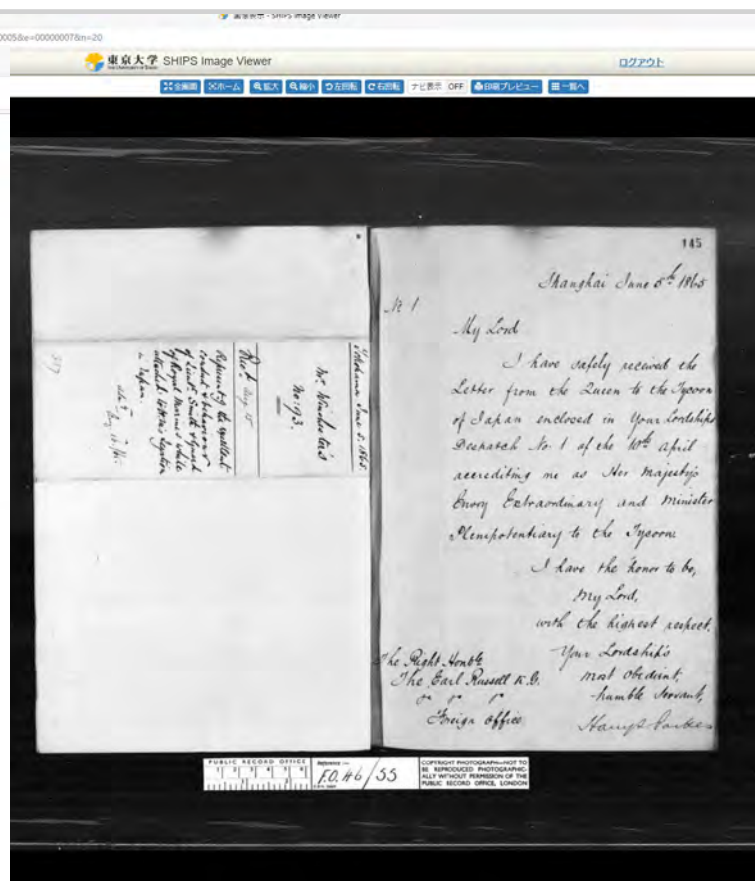
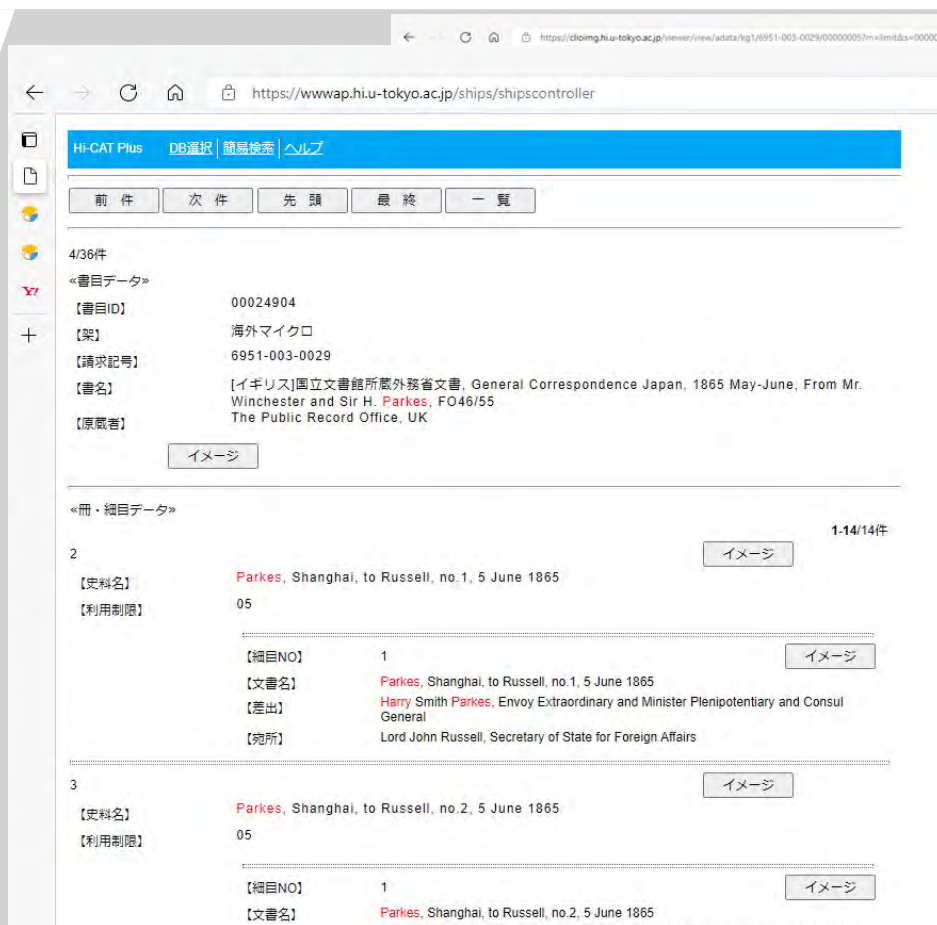
3) 研究資源化の到達点と意義 〈デジタルアーカイブの構築〉

デジタルアーカイブ化した在外日本関係史料の収集先（作業中含む）

オランダ：国立文書館・国立ユトレヒト文書館／イギリス：国立文書館・大英博物館・大英図書館／スペイン：王立歴史アカデミー・国立図書館・サン・ロレンソ・デル・エスコリアル宮殿図書館・シマンカス国立総合文書館・インディアス総合文書館・サラマンカ大学図書館・王立歴史アカデミー・スペイン国立歴史文書館
シンガポール：国立図書館／アメリカ：ニューベリー図書館・議会図書館・国立公文書館・イエール大学バイネッケ貴重図書館・ハワイ州立文書館・イエール大学図書館／ヴァチカン：ヴァチカン枢密文書館・ヴァチカン使徒図書館・ヴァチカン宣教省／イタリア：ボローニャ国立文書館・ローマ国立中央図書館・アンジェリカ図書館・ヴァリチェリアナ図書館・カザナテンセ図書館・アレッサンドリーナ図書館・ローマイエズス会文書館／ポルトガル：アジュダ公共図書館・エヴォラ公共図書館兼地方文書館・リスボン国立図書館・科学アカデミー・トルレ・ド・トンボ国立文書館・ポルトガル外務省文書館・コインブラ大学総合図書館／メキシコ：メキシコ国立総合文書館・メキシコ国立図書館／ベルギー：ボランディスト図書館・アントウェルペン国立文書館・王立文書館及王宮文書館／フランス：フランス外務省・国立文書館・ジャン及びラウル・ブリュノン軍事博物館[アンペリ博物館]・海軍中央文書館（海軍歴史資料部）・国立海外文書館／ドイツ：ドイツ連邦公文書館・旧東独ドイツ中央文書館・ブレーメン国立文書館・ハンブルク国立文書館・国立プロイセン枢密文書館・旧西独外務省政治文書館・連邦軍事文書館・バーデン地方図書館／スイス：スイス連邦文書館／オーストラリア：外務省／インド：インド領国歴史文書館・ゴア州立文書館／スウェーデン：国立文書館・ウプサラ大学図書館／デンマーク：国立文書館／オーストリア：オーストリア国立文書館／インドネシア：インドネシア国立文書館／中国：中国第一歴史档案館・中国国家博物館・マカオ市政庁文書館／ロシア：国立海軍文書館・国立歴史文書館・国立サンクトペテルブルク図書館・科学アカデミー文書館

1 在外日本関係史料の研究資源化

3) 研究資源化の到達点と意義 〈デジタルアーカイブの構築〉



TNA所蔵英国外務省文書 (FO46)

検索・閲覧の事例

キーワード検索から史料画像を閲覧室端末で閲覧

1 在外日本関係史料の研究資源化

3)研究資源化の到達点と意義 〈デジタルアーカイブの構築〉

○在外日本関係史料の調査・収集は、日本史の研究に新しい研究素材を提供するだけでなく、海外の複数の文書館を博搜するマルチアーカイヴァルな研究、複数の言語によるマルチリンガルな研究を進めるツールとして活用されることを期待しています。

○次に、在外日本関係史料調査の一環として行ってきたロシア調査の事例をご紹介します。

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

1) サハリンアイヌ交易帳簿の「発見」と共同研究

○ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部（現在の東洋古籍文献研究所）が所蔵する2つの帳簿を初めて見たのは、2002年のことでした。いずれも日本語で記された江戸時代の帳簿でした。

○研究協力の協定を結び、帳簿の翻刻とロシア語翻訳を行う共同研究を開始しました。



ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所所蔵「大福帳」

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

1) サハリンアイヌ交易帳簿の「発見」と共同研究

○帳簿記載の解析は、北海道大学の谷本晃久先生にお願いしました。

「大福帳」（625丁）には、サハリン南端の居住地ごとにアイヌ男性184名の名前があり、米・酒・鉄製品・たばこ・漆器・木綿衣類など48品目が日本側から、代わりに、ニシン・ナマコ・サケ・鯨などの産物がアイヌ側から引き渡されています。

○もう1冊の「簾貸帳」（119丁）には、アイヌ女性との取引190件が載せられ、酒以外の日本製品と簾（水産物の干製に用いるもの）・苫（帆に用いたか）が交易されていました。

○2冊とも、松前藩主が直轄するサハリン南端のアニワ湾岸（そのうちシラヌシからシレットコまでの分）における取引の記録であり、兵庫湊の商人柴屋長大夫が、クシュンコタンの出張番屋で作成したものでした。

参照：谷本晃久「帳簿の概要とアイヌ交易研究」『東京大学史料編纂所研究紀要』20号、2010年（<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/20/kiyo0020-tanimoto.pdf>）／谷本晃久「ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所サハリンアイヌ交易帳簿の研究概報—19世紀初頭アニワ湾岸地域における交易のすがた—」『東京大学史料編纂所研究紀要』24号、2014年（<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/24/kiyo0024-04.pdf>）

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

1) サハリンアイヌ交易帳簿の「発見」と共同研究

○2つの帳簿は、ともに文化2～3（1805～6）年の記録であり、アイヌとの交易帳簿としては最古、サハリンにおける唯一のアイヌとの交易を示す史料でした。

○同時に、帳簿記載の下限が文化3（1806）年9月5日であったことが注目されました。この最後の日付のわずか数日後に、ロシア艦によるクシュンコタン襲撃事件があったからです。2つの帳簿は、このときの襲撃の接收品と考えられました。



参照: ワジム・クリモフ「サンクトペテルブルグ東洋古籍文献研究所(旧東洋学研究所)所蔵の交易帳簿について」『東京大学史料編纂所研究紀要』20、2010年 (<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/20/kiyo0020-vklimov.pdf>)
／同「サンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所写本フォンド・コレクション所蔵の二冊の帳簿」31、2021年

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

2) 19世紀初頭の北方紛争と接收品

○1806～7年の北方での紛争は、日本側では「文化の魯寇」とも呼ばれる事件でした。

○ことの発端は、1804年、ロシア使節ニコライ・レザノフの長崎来航にありました。



東京大学史料編纂所所蔵
「ロシア使節レザノフ来航絵巻」

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

2) 19世紀初頭の北方紛争と接收品



レザノフが「軟禁」された館（長崎）

東京大学史料編纂所蔵
「ロシア使節レザノフ来航絵巻」

○日本との通交・通商を要求するレザノフに対し、幕府は回答を半年間引き延ばした挙句、親書や贈り物も受け取らないという強硬な態度でこの要求を拒絶しました。

幕府はこのやりとりによって、いわゆる鎖国政策を祖法として再認識することになったわけですが、このとき、「怒らせれば（あきらめて）二度と来ないだろう」という「危険な」計算が幕閣にあったことも明らかにされています。

参照：藤田 覚『近世後期政治史と対外関係』
東京大学出版会、2005年

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

2) 19世紀初頭の北方紛争と接收品

○レザノフは、露米会社の北米毛皮交易拠点に対し、日本からの物資調達に期待していました。

幕閣の思惑に反し、レザノフは部下のフヴォストフとダヴィドフに対して北方の日本拠点襲撃を命じます。武力の誇示によって幕府の拒絶的な態度を変えさせようとする策でした。



長崎奉行所へ向かうレザノフ

東京大学史料編纂所所蔵
「ロシア使節レザノフ来航絵巻」

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

2) 19世紀初頭の北方紛争と接收品



○プロジェクトでは、ロシア国立海軍文書館などで一件の関係史料を調査・収集しました。

レザノフは、「アニワ湾に入り、日本船を見つけ次第殲滅」せよと部下に命じ、1806（文化3）年から翌年にかけて、蝦夷地で何回かの襲撃事件が発生し、蝦夷地警衛に駆り出されていた東北諸藩とのあいだで小規模な戦闘がありました

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

2) 19世紀初頭の北方紛争と接收品



クンストカーメラ（ロシア国立人類学民族学博物館）

○2009年、この紛争で日本から接收された品がクンストカーメラ（ロシア国立人類学民族学博物館、サンクトペテルブルク市）にあることがわかりました。

翌2010年、同館のアレクサンドル・シニーツィン先生を東京に招聘して報告をお願いしました。

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

2) 19世紀初頭の北方紛争と接收品

○シニーツィン先生によれば、日本からの接收品については、1810年と1814年の2つの目録が科学アカデミー文書館にありました。ここには、武器・武具の類や書類、日用品が書き上げられ、いずれもクンストカーメラとアジア博物館、つまり現在の東洋古籍文献研究所に移管されていました。



参照: アレクサンドル・シニーツィン「ロシア科学アカデミー人類学・民族学博物館(クンストカーメラ)が蒐集したフヴォストフ・ダヴィドフ遠征関係資料について」『東京大学史料編纂所研究紀要』21号、2011年。
(<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/21/kiyo0021-aysinitsyn.pdf>)

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

2) 19世紀初頭の北方紛争と接收品

○シニーツィン研究員が指摘した接收品のもうひとつは、現在ロシア国立軍事史博物館（砲兵博物館）に保管される日本の大砲3門でした。



ロシア国立軍事博物館図録より

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

2) 19世紀初頭の北方紛争と接收品

○1822年7月、露米会社理事からサハリンで取得した「大砲2門」と、「小口径砲2門」のうち1門の計3門を皇帝へ献上する書簡が、ロシア国立歴史文書館に残されていました。

プロジェクトでは2011年に大砲の実測調査を実施し、このうちの1門が戦国大名大友宗麟のフランキ砲（子母砲）であることを明らかにしました。



大友宗麟(1530-1587)



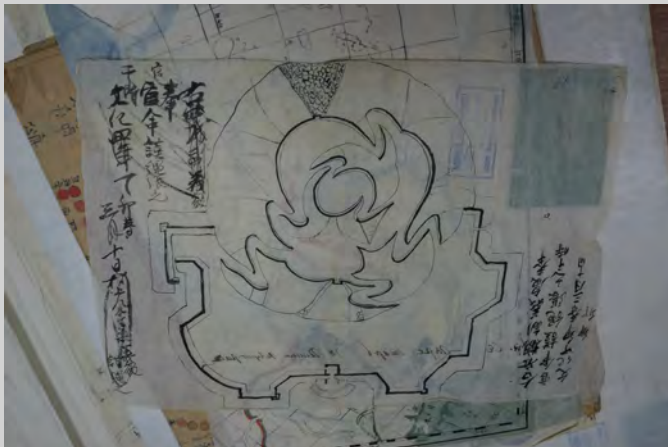
大友宗麟肖像模本とローマ字印章(FRCO)

砲身に刻まれたFRCOの組文字、宗麟の洗礼名フランシスコを示している。

参照：神田高士「ロシア国立軍事史博物館所在の子砲式後装砲について」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』56号、2012年

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

3) 北方紛争が生んだ日本コレクション



○接收品のルートはこれだけではありませんでした。その後の調査でも次々と関係する史料群が見つかるようになりました。

2014年、ロシア国立海軍文書館で閲覧した史料群には、幕臣村上左金吾の所持品と思われる図面類がありました。村上は利尻付近でロシア艦に襲撃された官船万春丸に乗船しており、城郭の縄張図や陣立図、戦陣で用いられる用具など86点の図面が含まれていました。



ロシア国立
海軍文書館
にて

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

3) 北方紛争が生んだ日本コレクション

○2016年、ロシア国立サンクトペテルブルク図書館では、露米会社ミハイル・ブルダコフの赤い蠟印が入った古文書や版本類が見つかりました。

○なかには、ノッカマップのアイヌ有力者ションコに宛てた安永7（1778）年の松前藩の蝦夷地奉行定書など、重要な史料が含まれ話題になりました。

参照：東俊佑「安永7年の蝦夷地奉行定書について」『北海道博物館研究紀要』2号、2017年。

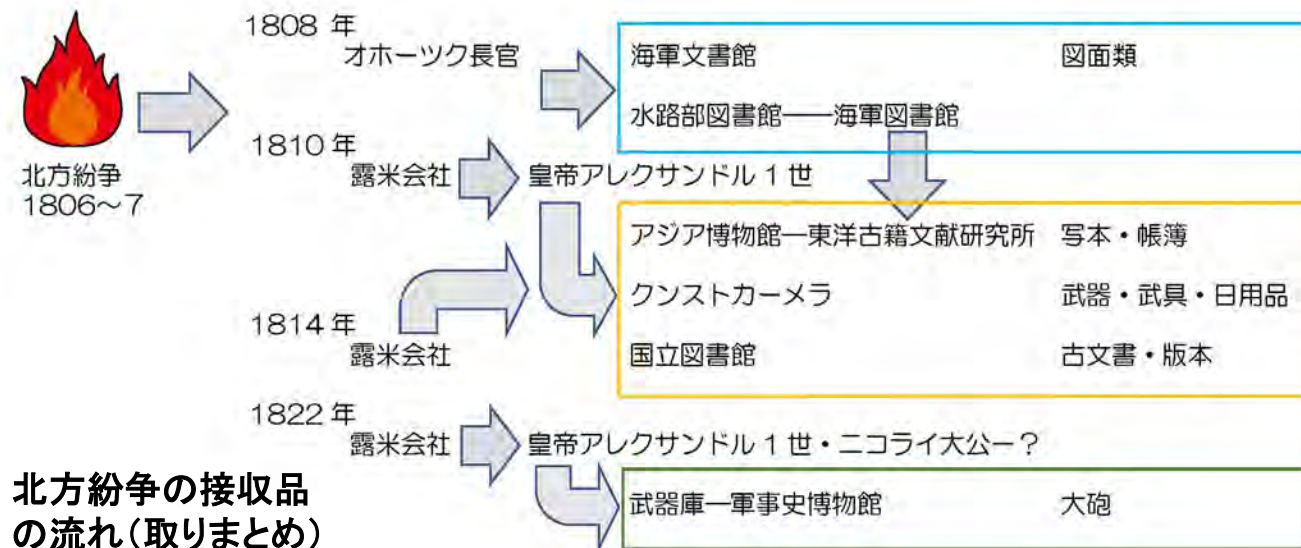
(https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/wp-content/uploads/2018/03/bulletin_HM_vol2_02_p15_24s.pdf)

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

3) 北方紛争が生んだ日本コレクション

○さらに、東洋古籍文献研究所にも、北方紛争に関係して多くの写本類が収蔵されました。同研究所のワシーリー・シェプキン先生は、北海道大学谷本先生のチームと連携して、18世紀末から19世紀初頭の日露間の接触による日本コレクション形成の歴史を明らかにしています。

北方紛争の結果として招来したコレクションの流れをまとめました。



参照: 前掲シニーツィン論文/ワシーリー・シェプキン「長崎に限らない—近世日本古典籍がロシアに渡った経緯について—」『東京大学史料編纂所研究紀要』29、2019年
(<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/29/kiyo0029-15.pdf>)

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

4) ポサードニク号事件をめぐる史料収集

○ロシア史料の調査をはじめたきっかけは、『大日本古文書』幕末外国関係文書の編纂が、文久元年すなわち1861年にかかったことにありました。

○この年、ロシア艦ポサードニク号による対馬芋崎浦の占拠事件が起こり、ロシア側の史料調査が必要となっていました。

最後にこの事件関係の史料調査の進展について触れておきたいと思います。



『大日本古文書』幕末外国関係文書、
現在は54巻編纂中

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

4) ポサードニク号事件をめぐる史料収集

○ロシア史研究者の保田先生は、ニコライ2世の日記翻訳などでも知られますが、かのフォン・シーボルトと帝政ロシアの関係についても研究されました。

○ロシアのアーカイヴをよくご存じで、先生にご同行いただき、モスクワのロシア帝国外交文書館の調査などを実施しました。



岡山大学名誉教授
故 保田孝一先生
(1929-2006)

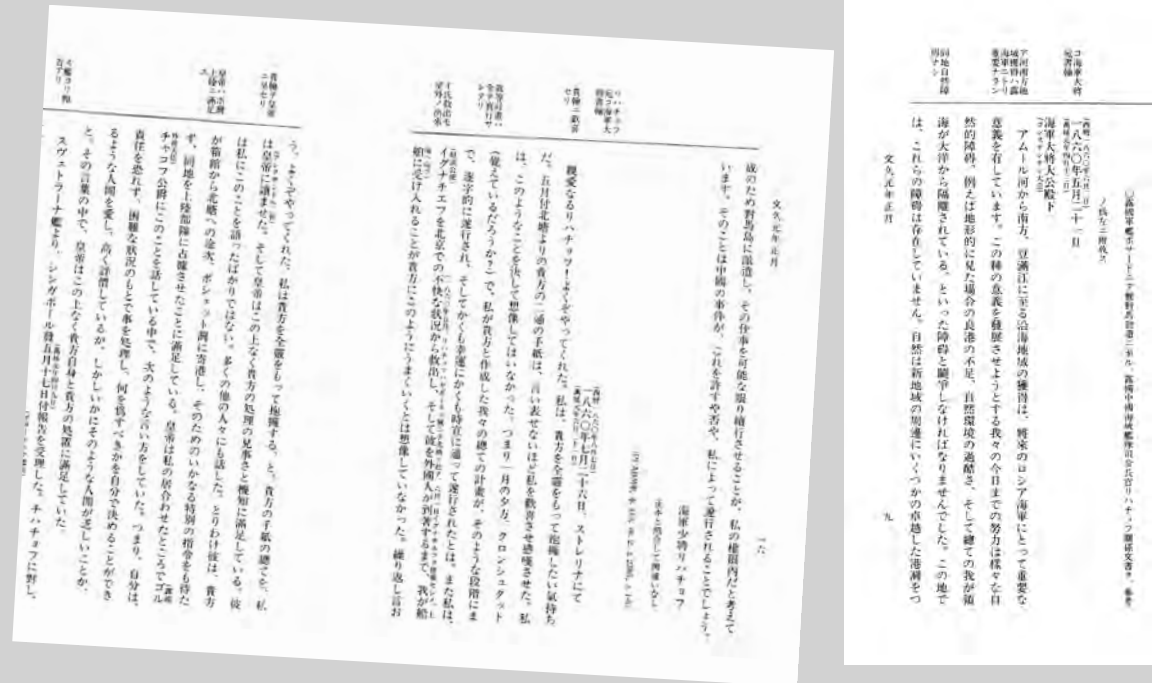


2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

4) ポサードニク号事件をめぐる史料収集

○対馬芋崎の占拠は、リハチョフ海軍大佐（のち少将）が提案し、皇帝アレクサンドル2世の弟コンスタンチン大公（海軍元帥）のもとで遂行されました。

○皇帝が参加した御前会議では、国際紛争となることを恐れた外相ゴルチャコフが、「外交案件としてではなく、純粋に海軍案件として、リハチョフに委ねる」と提案したことも明らかにされています。



『大日本古文書』幕末外国関係文書48、2001年

事件については、麓慎一「ポサドニク号事件について：ロシア海軍文書館所蔵Φ41002 д 2385を手掛かりに」『東京大学史料編纂所研究紀要』15、2005年 (<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/15/kiyo0015-fumoto.pdf>)
 ／ワレンチン・スミルノフ「イヴァン・フョードロヴィチ・リハチョフの対馬計画(1860-1940)」『同前』28号、2018年 (<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/28/kiyo0028-15.pdf>) など。

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

4) ポサードニク号事件をめぐる史料収集

○対馬芋崎の入り江にはポサードニク号が停泊し、上陸して2つの波止場や兵舎、台場、井戸、風呂場、鍛冶場に工作小屋などを建設しました。



東京大学史料編纂所蔵「対州魯人小屋取建有之場所図」

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

4) ポサードニク号事件をめぐる史料収集

○調査・収集した史料群には、リハチョフ関係史料や作戦に参加した軍艦のログブック、リハチョフの航海日誌も含まれ、翻刻・翻訳して順次史料集に掲載しています。

○約半年間に及んだこの占拠事件も、幕府や英国の抗議によって終結します。絶望したリハチョフは、「将来の希望を失ったかもしれない」と日誌に書き込んでいました。



イヴァン・リハチョフ
(1826～1907)

参照: ワジム・クリモフ「リハチョフ、イヴァン・フョードロヴィチ(1826～1907)「艦隊司令長官、学者、人間」」『東京大学史料編纂所研究紀要』24、2014年(<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/24/kiyo0024-18.pdf>) / ビクター・シュマギン「リハチョフ航海日誌」から読み解く対馬事件」『同前』25、2015年(<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/25/kiyo0025-04.pdf>)

2 ロシアでの史料調査と共同研究の成果

4) ポサードニク号事件をめぐる史料収集

○1861年12月の皇帝の御前会議では、ポサードニク号事件については済んだことであり、「行き違い」と表明することや、境界未確定のサハリン（カラフト）についてどこまで認めるか、また、日本がサハリン南端を放棄するのであれば、ウルップ島を与えてもいいなどと認めていました。

1861年12月、ロシア皇帝が裁可した特別委員会の
議事録（ロシア帝国外交文書館所蔵）

おわりに

- 在外日本関係史料の調査は、日本や日本史研究に新しい研究素材をもたらします。さらにまた、在外日本関係史料調査は、新しい視座から東アジアや世界の動きの中で日本史を考えていく大事なきっかけになると考えています。
- 東京大学史料編纂所の在外日本関係史料デジタルアーカイヴズが活用されることに期待しています。
- 在外日本関係史料の調査と研究資源化の事業は、国際的な共同・協力関係のもとで、まだまだ発展する余地があると考えます。今後とも事業へのご支援・ご鞭撻をお願いします。

本報告は、JSPS科学研究費補助金基盤研究（A）20H00023等の支援を受けました。